学　校　便　り　　琢磨

令和３年度　第 31 号　R4. 2. 21　三豊市立詫間小学校

２年松組の担任の交代について

２年松組は、１０月下旬から担任の松本教諭が産休のため、大山教頭が担任、綾教諭、横山教諭が副担任をしておりました。

本日から産育休を終えて復帰した亀井　千弘（かめいちひろ）教諭が、２年松組の担任をすることになりました。なお、しばらくは、綾教諭、横山教諭が２年松組の支援に入ります。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

栄光を讃える！

第 17 回香川県小・中学校総合文化祭展覧会小学生の部　　（敬称は略します）

硬　　筆　６年　渋谷　真央

図工平面　２年　渡部　永琉

明日（２２日）、放送にて賞状の伝達を行う予定です。おめでとうございます。

学校便りの配付方法の変更（次年度）

保護者の皆様から「学校便りはホームページにも掲載しているし、紙代やインク代の節約にもなるから、家庭１枚にしてはどうか。」といったご意見を、複数回いただいておりました。

検討しますとの回答をしておりましたが、来年度から、学校便りは家庭１枚（長子のみ）配付とさせていただきます。なお、原則、紙媒体で発行した日に、ホームページにもアップいたします。

本年度いっぱいは、全児童に配付いたします。よろしくお願いいたします。

６年生全体授業（研究授業）をしました！

かなり前のことになりますが、６年生はランチルームで全クラスが集まって合同の「６年生全体授業」を行いました。１月２６日（水）のことです。この授業は、人権・同和教育の授業で、校内の研究授業でもありました。

担任の３名の教員が協力して、３クラス７４人で授業をしました。大勢の前でも、堂々と意見を発表したり、差別をするお母さん役をする教員に対して、子どもたちが次々に考えを浴びせかけるように発表したりする姿に、たのもしさすら感じることができました。

マイク（大声を出さないため）を受け取るとき、全員が会釈をして受け取っていたことにも感動しました。

真鍋校長の独り言　その１６

私が教員になった理由

物事には、「因果関係」というのがあります。「因とは……原因」で「果とは……結果」です。しかし、世の中の出来事はそう単純ではなく、１つの結果に対して１つの原因があるわけではありません。ですから、「あなたは、なぜ教員になったのですか？」と聞かれたら、「そうですね、話せば長くなります。」となるわけです。しかし、もし、「あなたが教員になろうと思った一番のきっかけは何でしたか？」とたずねられたら、私は即答することができます。それは「教育実習」です。

教員になるためには教員免許というのを取得しなければなりません。その教員免許を取るために必要な単位（最も重要な単位）に教育実習というのがあります。簡単に言えば「大学生の時に実際に学校に行って先生の見習いのようなことをする」ということです。多くの大学には附属学校というのがあって、そこで教育実習をすることができます。私が行った大学にも附属学校はありましたが規模が小さくて教員を目指す学生全員を受け入れることができませんでした。そこで、自分が卒業した地元の学校にお願いして教育実習をさせていただくのです。私は、勝間小学校の出身でしたので、そこで大学４年生の時（２２歳：下の写真は当時のもの）約１か月の教育実習をさせていただくことになったのです。

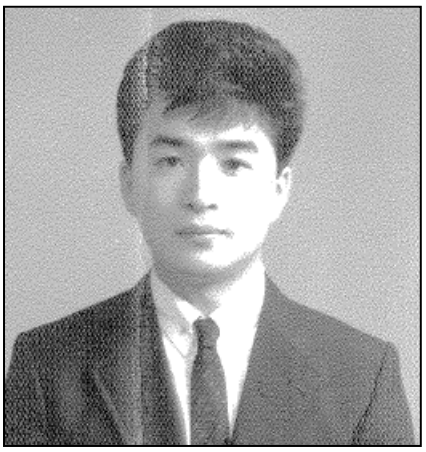
実は、その時。私は、あまり教員になるつもりはありませんでした。私の父親は高校の教員、母親は幼稚園の教員でしたので、両親の勧めもあり何となく教員養成課程がある大学に進学しました。しかし、私はあまり真面目な人間ではなかったので、人から「先生」と呼ばれるような仕事はとてもできないと思っていました。かといって何かやりたい仕事があったわけでもありませんでした。とにかく、その大学を卒業するためには、教員免許を取る単位を取得しなければいけないので、仕方なく教育実習に行ったというのが正直なところです。

その実習で、私が配属されたのが６年２組でした。私は２２歳、６年生は１２歳ですので、子どもたちからすれば「先生というよりはお兄さん」みたいなものです。しかも授業をしてもそこはまだ大学生。下手くそですし、子どもの気持ちも分かりません。それでもクラスの子どもたちは、私を「真鍋先生」と呼ぶのです。生まれて初めて人から「先生」と呼ばれ、「この子たちの大切な授業なのだから精一杯がんばらなけりゃ！」と思ったのです。その１か月は、それまでのいいかげんな生活とは違って、それこそ命がけで一生懸命「先生業」をやりました。授業の仕方や子どもとの接し方もたくさん学びました。大学で学んだことは、直接通用することは少なく、やはり現場に出て実際に学ぶことの意義と同時に厳しさも身にしみて実感しました。

そんな中で、私には大きな悩みがありました。そのクラスのある一人の女の子だけが、私に反抗してくるのです。声をかけても無視。近づくだけで拒否するのです。そして、友達にわざとらしく「真鍋は、まだ本当の先生じゃないよな。授業なんてしてほしくないわ。先生なんて呼べんし。」なんて私に聞こえるように話しているのです。

みんなが「先生、先生！」と慕ってくれると思い描いていた私は、心の底から「ポキッ」と音がするくらい心が折れていました。この子とのことを担任の先生も知っていましたが、特に何もアドバイスはいただけませんでした。

その子との関係もそのままの状態で、私は教育実習最後の日を迎えました。そして、その時に私はその子からもらった手紙を読んで愕然としました。その手紙には、「４週間、ありがとうございました。いろいろごめんなさい。真鍋先生は、とてもいい先生です。大好きです。私は先生とお別れするのが悲しいです。」と、とても丁寧な字で書かれてかれてあったのです。担任の先生は、そのことをちゃんと知っていて、敢えて何もおっしゃらなかったのです。この時、私は、何が何でも小学校の先生になりたい！と心の底から思ったのでした。

あれから、３６年が経ちました。

３６年前の私→